

会員紹介：今井正幸さん

私の略歴



1936年広島生まれ。広島修道中学と広大付属高校を卒業。東京外国語大学・国際関係コース卒業、東京大学法学部公法科卒業。（此の間、京都大学大学院国際政治コースに在籍、中退）1964年東洋高压入社、主として輸出部門でアジアへの軽工業の原料の輸出業務を担当。

1970年からアルジェリア・プラスチックコンビナート・プロジェクトに従事。1972年からフランス政府留学生としてソルボンヌ・パンテオン大学院の開発経済学博士コースに在籍し、のちに博士号を取得。1977年海

外経済協力基金（OECD）に転職。基金では南西アジアを1年担当したのち新設の中近東北アフリカ担当のカイロ事務所設立と地域担当に従事。帰国後、中東担当、アフリカ担当、アセアン担当と常に現業畑を歴任し、その後三祐コンサルタンツに勤務。1997年からは日本福祉大学経済学部で開発経済学、国際開発金融などを担当する教授に就任。1980年から1年間、フランス・ポー大学に留学し仏開発経済学との復縁を果たした。2007年定年退職後、直ちにフランス・エクス・プロバンス大学へ籍を置いて自由に研究する外国人研究者として3年間滞在。帰国後、いくつかの同好者の団体に所属し開発問題に関わっている。SRIDには1976年2度目の留学のパリで、大来佐武郎先生に直接、懇話されたのを機に帰国後直ちに入会した。三上、松本、浅沼諸先輩に次いで古参会員である。

従事した仕事の内容

三井東圧化学工業時代（入社は東洋高压工業であったが、合併後のこの社名で勤務した時期が長い）と**TEC時代**（東洋エンジニアリング）

総務文書課時代

1年工場勤務の後、法律屋だけが集まる文書課に勤務し官庁や金融機関相手の極めてルーチンな業務に従事した。金融機関には融資を受けるための担保の設定手続き、農水省には新製品が出るたびに登録を行う事、大蔵省には会社の実情を記載する有価証券報告書を作成して提出する作業と地味ではあるがなかなか骨の折れる仕事だった。ただ、企業の基礎的な運営の姿を把握するには、益する事が多かった仕事であったかもしれない。まもなく、出発間もない輸出部に無理やりのような印象で引き抜かれた。それは能力など関係なしに

この古い老舗ともいふべき大企業には当時、初期的段階にあった輸出作業に従事するような若年層のスタッフが不足していたことによるのだろう。

化学品、樹脂輸出部門

同社の最重要製品、化学肥料は業界第1位で業界全体が共同で中国他に輸出していたが他の化学品、樹脂、プラスチックは国内販売部門が商社を用いてアドホックに輸出を行う程度であったが、昭和41年に初めて輸出課をつくり後に輸出部に昇格させた。この部に所属して数年間、自分は組織勤務者としては、実に自由に活動し実績を積み上げたように記憶する。また、この部の仲間は実に気持ちの良い人々でのちのちまでも付き合いが続いている。ともあれ、最初の1年はプラスチックの原料を、続いて工業用樹脂を主に東南アジアに向けて輸出する業務は難しいというより驚くほど多忙を極めた。

製品の銘柄数は多く、出入りする商社、小メーカーとの交渉は連日寸分の間もなく続いた。社内では工場、専門技術者集団、国内販売部門、管理部門など広く関係部門につながり各関係先と毎回調整を要する。商品ごとにパンフレットを作成し、また製品の知識は外国人の顧客を商品技術研究所へ案内するたびに一緒に研修を受けながら習得した。夜は外部のお客とのお付き合いの往復が続く。熱意が実って毎月実績が上昇していくのが数字で表れる。空前と評されたスピードでの実績の伸びも利益率もそれが自分の営業力によるものと自認したことはない。これだけの関係部局とサポーターあればこそその成果であった。また外国のディーラー達の力量による拡販の道であった。ともかくプラスチックは半年50万円から1億5千万円へ、樹脂は0円から1億円へとしゃにむに行った営業活動はやりがいのある業務であった。加えて対象がプラスチックの加工から、繊維、塗料、紙など折から市場の東南アジアで勃興しつつあった軽工業の原料品でありこの軽工業の発展の姿はアジアの現地の工場を駆けずり回って販売に従事した経験から、何十年かのちに開発経済の実際の知識として学生に講義するほどの記憶となった。

アルジェリア・プラスチック原料生産コンビナート建設プロジェクト

三井東圧化学工業の有力な子会社に東洋エンジニアリングというプラント建設専門の企業がある。1960年代末その時期、日本が受注した海外プロジェクトのうち最大規模と言われたアルジェリアでのコンビナート建設プロジェクトに長期出向で参加した。本国での準備期間は多くの翻訳者の世話役、エンジニアリング設計の進捗に合わせてその機械類を輸入する通関書類の作成、来日する相手国のプロマネージャーやそのスタッフへの対応など多忙ではあるが、手ごたえのある作業を行った。ここでもエンジニアでなければ人にあらずと言えるほどの技術者優先の雰囲気にも包まれていたが、それは問題ではない。彼らの

世話をしているうち、自ら相互の存在理由が理解しあえ、現場での大作業の基本的関係づくりを行うことが出来た。

途中に仏国政府給費留学生としてフランスに留学をしたが、帰国後は直ちにアルジェリアのスキクダという建設現場に直行した。日本がオイルショックに見舞われる 1974 年のことである。この時期、中東アラブの産油国はこぞって石油産業の工業化を目指していた。彼らが有する石油天然ガスの原料に付加価値をつけて先進国並みに輸出をして経済発展をはかろうという野心的な開発戦略をとっていたのであるが、成果は如何になったか、その後の実情がそれを物語っている。

それはともかく、建設現場での業務は知る人ぞ知る、である。このプロジェクトの初期には50～60名の集団であったが、各人は協力姿勢ではいるものの、まず、生活というものが何らかの点でアブノーマルになっていたとしか言いようがない。仕事はすべてフランス語であるから、通訳を各部門に配置し、建設工事を進めていく。自分の役割はアドミニストレーションのディレクターとして、日本人グループの世話役、現地労働者の総監督という立場である。この経験者は社内にはすでにかかなりの数の人がいたのだが、すべて英語で対応してきたのでフランス語での対応にはやはり大きな障害が生じたようである。現場ではコミュニケーションのギャップから生じるトラブルは連日のように発生した。感情と利害が交差する現場作業から何を学ぶかと自らに問うても、出来ることはその日その場を最善で切り抜けるという行動、それだけだったかもしれない。

45年後に途上国の思い出として、その経験を記述した際、傍人から、何か記録を持っているのかと聞かれても「何もないが、その経験が酷烈だったから記憶も鮮明だ」と答えるしかなかった。相手国の底辺にいる労働階層、村人、町の小商人、ポリス、コックあらゆる種類の人々が関わり合って、利害と感情によって蠢いてゆく。その集団や個人の間をうまく調整し目的のコンビナート建設を進めてゆく。それが開発の実の姿だという痛切な実感はそれ以降、一貫して自分の信条となったようだ。短い期間でもそこでの実話や経験を列記すればきりがないうだ。でも後のコンサルタンの業務よりもこの建設現場の経験のほうが開発の現場としては強烈な印象を残しているような気がする。

海外経済協力基金（OE C F）の時代

カイロ首席駐在員

留学から帰ってTE Cの社長室に勤務しているとき、誘いがあり政府機関OE C Fに奉職することになった。直接の勧誘の場となったのはほかでもない我がSR I Dであった。自

分が給与生活者として自らの意志で転職を図ったのは生涯でこれが只一度の経験であった。OECFでは先ず南西アジアのバングラデッシュ、スリランカの業務担当として1年間は円借款の実施を学んだ。しかし、自分を採用してくれたのはアラブ国での経験を買ってくれたのか、翌年には新設のカイロ事務所の開設仕事を命じられ初代首席駐在員に任命された。エジプトに対する援助の増大はほかでもない、アメリカの対外政策としてイスラエルとエジプトへの援助を増強するその一環を日本政府が担がされたことによる。その増加の速度は急であり、やがて無理がたたり、ほころびが生じる結果を招く。

スエズ運河拡張事業 (I) (II) およびスエズ運河浚渫能力増強事業。

いずれもスエズ運河庁を借入人とするエジプトにとっては大プロジェクトである。前者では浚渫の事業の進捗に応じた業務に対する管理を行い、後者は浚渫船2隻の購入の実現への協力であった。一人事務所として対応したこれらのプロジェクトには苦い思い出もあり誇らしい成果もある。後者の購入は激しい国際競争入札がからみ、政府間のENでは120億円と記載されていたが、競争の結果、94億円プラス、スペアパーツ分が2億円という落札価格になった。日本政府は96億円で開発の目的は達したのだから、それを限度として貸し付けるといい、エジプト側は120億円が政府間の約束だと解していた。ともかくこの残枠24億円は6か月のちに相手側と根回しを行い、パイロットボートを12隻購入する費用に充てた。

長年にわたりイスラエルと準戦争状況を続け、政府は国内のすべての開発や施設の維持管理に資金を回すことが出来なかったのである。「すべてのプロジェクトはフィージブルである」と公言する大臣がいるほどこの時期には多くのプロジェクトの候補があり、またそれらに西欧諸国も開発資金を提供しようとする。言い換えれば、この市場に食い込もう、そして政治的にも影響力を持とうとする動きを呈していた。

記憶する日本の円借款対象になった、いくつかのプロジェクト名を列記しておく。自分の着任前から借款を付していた事業としてカイロ水道改善事業 (I) (II)、アレキサンドリア港改修事業などがある。

加えて新規に案件形成をしたものには先述したスエズ運河の浚渫船の供給事業に加え、アスワン砂糖キビ生産改良事業、デキラー直接還元一環製鉄所建設事業、アスワン第2水力発電事業、エルサラーム水路揚水機場建設事業、スエズ地帯電話網事業等々、自分の赴任以前は数年分を年平均にして約40億ないし50億円規模の借款供与の対象国であったものが、一挙に1年あたり500億円のノルマを実績にせよとの日本政府のお達しである。



エジプト、アスワン
砂糖きび生産改良事業

現地スタッフを叱咤激励しても結局は自分が関係各
省庁を日々駆けずり回って案件の成立を図るしか
ない。

それまでは弱小な省であった経済協力省の担当次官
と協力、談判駆け引き、根回し、経済協力とはその
実施面では大変なビジネス作業を伴うものなのだ

痛感させられた。またその故にやりがいのある仕事であり、あたかも売り上げ実績が急成長するかのような満足感もあった。数年後いや20年後に訪れてもエジプト側の古参の担当官はよく私を記憶してくれていた。奇遇した老人のエージェントは言う。「お前くらい相手に言いたいだけ言って議論をした日本人もいなかっただろう。だがどんな場合でもお前にはエジプシャンの言い分をまず聞く姿勢があった。だからお前は彼らの間に大きな信頼を勝ち取ったのだ」と。「いや、それはあくまでお金の力である」と控え目に反対したが、彼は聞きいれない。自画自賛かもしれないが、大半の日本人が苦手とするアラブ人社会で相手との間に深い信頼を築いたと自負できる実り大きい3年間の駐在員生活であった。

中東アラブとインドネシアおよび太平洋諸国担当

帰国後、これらの対象国の業務を担当し、案件としては非常に興味あるものに取り組んだ。インドネシアのアサハン水力発電アルミ製錬事業である。現地視察に行った折、丁度、第2ダムが完成して最終チェックとして雑巾がけをやっている作業を見学できた。作業の呼称のとおりエンジニアはダムの底に張り付いて雑巾で床を拭く、これが最後段階でひび割れなどの有無をチェックする方法なのだ。この大プロジェクトへのローンは十数本に分けてあり各対象部分の工事の進捗に合わせてディスバースしていく。大メーカーの経理マンはさすがである。1点のよどみもない説明を聞いて、ダム工事、アルミ工場の建設ともに順調に推移していることが把握できた。パプアニューギニアの電力事業の現地審査を行ったのもこの時期である。そこでの水力発電の入札をめぐる紛糾も丸く収めた。

アフリカ担当続いてアセアン諸国担当

アフリカ担当は期間も短く現地出張も直属上司だけが出かけ、とても自分までが出かける時間がとれなかったが、対象国の数が多く、ために案件へのファインスの可否を問う役員会には五月雨のようなペースで出席せねばならない。とは親切な前任者から引き継いだ心がけであった。事実、その任期間、間断なく役員会にかかる準備に忙殺され続けたのを記憶している。しかしスタッフは熱心で有能な者が揃っており満足できるポジションであった。この間、エジプトの案件で相手国の法律最高機関のチェックによるローン契約の修

正に応じなければならないという奇妙なトラブルに巻き込まれた経験もある。アフリカのある国では開発事業の建設機械類をその国の大臣が自分の邸宅に持ち込んで私用しているとかいろいろなトラブルが頻発する対象国への援助活動であった。

続いてアセアン担当として、対象国はタイ、マレーシアの2国だが案件数、金額ともに大規模な業務部門では最重要な対象国に取り組んだ。タイは折しも東部臨海開発計画の実施に着手しており、1986年には政府ミッションに参加して後、継続して基金審査ミッションの団員16名を束ねる団長の任に着いた。このときは東部臨海開発計画プロジェクトの審査対象の案件は、すべて実地訪問して監督を行った。タイ国が工業化によりテイクオフして大工業化に踏み出す転換期の大型政府開発援助であっただろう。帰国後、役員会に連続して案件への円借供与を審議する作業を行ったがこれらも何ら苦にならない。この部では有能なスタッフに恵まれて実りある時期を過ごした。

これ以降、民間のコンサルタントで実際のコンサルタンツ作業を行う時期が続くが紙面の都合もあり大学教授の時期と合体して記述する。

民間コンサルタント、日本福祉大学教授の時期

民間コンサルタント

三祐コンサルタンツという民間コンサルタントで業務に実際に従事してみて初めて学ばされる事柄は極めて多く、それまでコンサルタント・サービスをいわば管理監督してきたという立場が気恥ずかしいような一面が強くなってきた。つまり理窟で口出しはするが実際に作業を行うとなると、体力、時間、生活条件などなど開発調査、案件管理などのサービスへの制約条件が大きいのしかかってくるという事実である。また日本の援助業界におけるサービスは国内で担当官庁が企画立案だけを自らが行き、調査設計のサービスを民間に分業として与えてきたという事情の延長線上で、国際金融機関、主に世界銀行などの制度を模倣して作っていった制度であることから、ハードの技術部門がすべてに優先する性格を強く有していた。このサービスを行いながら関与した開発プロジェクトの数あるいは訪問した途上国、出張日数など相当な量になる。しかしそれらが開発の専門家としての自らを形成するのにどれだけ役立ったかと自問すると決して十分満足な回答を得られるものではない。だが、いかなる経験も「それをポジティブ思考で捉える限り必ず益するものがある」という信条を抱き続けた。その甲斐があったのか後半、この経験を手段にして自営業を試みたものである。

日本福祉大学経済学部教授

1977年、僥倖に恵まれたのか、自分の経歴の最終段階で大学教授の定職に就くことが出

来た。基金の支援と昔パリで取った学位が多少なりと役立ったか。ともかく担当する対象は「開発」そのものである。ただ若干、自分の思惑と先方の計画には齟齬があったようだった。新規の学部は開発と経営を合体したものだが、福祉を根底に据え置こうとしたためか、この時期、まさに流行りとなったNGO、NPOを主流として教授面々もそれを専門とする人々を多く集めていた。しかし彼らが主役として闊歩しようと自分は我が道を切り開くだけである。だから正統派ともいえる政府開発援助、経済協力、開発金融などの専門を開講して若者を相手に長らくやってみたかった先生稼業を自由自在に行った。また任期中は、2-3日、病で欠席した以外は教授会を含めて皆勤状況なので不評はなかった。



日本福祉大学でのゼミ学生指導の一コマ

き利点は留学生が特に中国からの留学生が極めて多いことだった。大学側の優遇措置が口コミで彼らに伝聞されているのだと言われたが、2年目の我が大学院ゼミの構成は15人中12人が中国学生という盛況であった。学部のゼミ生を連れて海外研修も3度行った。次項で触れるサバチカルでフランスでの研究生活も含め極めて快適な11年間を過ごすことが出来た。

ところで、着任に際して準備に入った段階で何十冊か教科書的な書物を点検してみたが、どこにも開発途上国の貧困への実感、利害相克する開発援助の実態のイメージが得られるものが見つからない。そこで数百の資料と3-40件のレジュメを作成して読み切り講談風に毎回区切りをつけて講義に備えた。ゼミも楽しく行えた。途中から大学院も担当し、ゼミ生の育成に努めた。この大学に特筆すべき

フランス・ポー大学での13か月と学会参加

着任3年目、研究科委員の仲良しの勧めによりその機会に気がつき、急きょ手続きを行い、フランスの南西部にあるポー大学で、サバチカルとして自由な研究生活を送らせてもらった。福祉大学へ着任の初年度の夏、学生の留学先の調査として南仏を主にして、いくつかの大学を歴訪しておいたのが役に立ったのだ。住居探しも市の助役さんの協力で市の中央部のマンションの中庭に面した閑静な1室を見つけた。バルコンをとうしてピレネー山脈の霊峰が毎日眺められる。丁度子供のころ4年間、毎朝目覚めると四国山脈が目に入る生活をした記憶と同じ快適さで、諸事万端に便利で快適な生活であった。フランスはパリの生活を一度しか知らなかった家内もポーの一年だけでも福祉大学には大恩があると漏らしたほど、かけがえのない思い出となったようである。大学のキャンパスは広くまた通うの

も便利だった。久しぶりの経済学の講義についていくのは、かなり苦心したが、とにかく慣れを取り戻すという有意義な毎日であった。とりわけ、優遇してくれた、Serge Rey 夫妻、名講義で聴講生に溜息まで漏らさせる Le Casheux 教授、仲間のフランス人、セネガル人、モロッコ人、チュニジア人達も限りなく親密な感じで接してくれた。

またこれを機にフランス開発経済学に何十年かぶりに復帰した感があるのは学会に定期的に参加する習慣を見出したことであろう。2001 年から参加して今日 2016 年まで親しんだ ATM「第3世界」での発表や討論は私の経歴の最終的な努力の対象であった。そしてこれを機に 2006 年にはパリ第9大学〈ドゥファイヌ〉で Mme. Sonia Benslimane の博士審査の審査員の役を要請され数年の準備の後に実施した。フランスとの付き合いはこれを機に復活したのか、定年後はこの学会の副会長の誘いもあって、南仏 Aix en Provence ポール・セザンヌ大学へ籍を置き自由な外国人研究者としての生活を送ることが出来た。ここには画家セザンヌの家があるだけでなく自分にとっての青山がある。

私の信条

改めて己の信条と問われると、浪費の多い我が経歴を考えると、口幅ったい感じがして何も言えないようである。しかし多くの人は何か自分のよりどころになる標語のようなものを抱えて生きてきているものであろう。自分は多くの優れた指導者に巡り合いながら、何にもそれを生かしてこなかったと痛切な反省を抱えながらも尚且つ自分の生き様はその時折にやりたいと思ったことを追い求めてきたのだ、と肯定して生き続けている観がある。個人の信条としては「常に現実的感覚を持てさえすれば、自ずと謙虚になれる」ということ。学ぶにあたってはこの信条から自分を白紙の状態に置き学習するように努める。

思えば癖の多い性格ながら、先生という人には特に可愛いがられた記憶がある。集団内の行動規範は「和して同ぜず」である。恩師、岡義武先生が講義の最終日に大きく板書されたこの標語は日本人社会において深奥な意味を有するものであろう。同一でないと和していない。という周辺からの圧力で自分を失うとか、不要な自己主張で調和がとれないとか、これらの労では、どれほど多くのロスを生じたことか。また実用生活、ビジネスそして開発事業を考える際はとりわけ重要なことは「相互の利益と第3者の利益」であったのではないか。きれいごとはいくらでも云える。開発の理念も人道的理想もちろんすべて大事なことは自明であるが、ひとたび現実的側面に直面するとこの関係者全部に対する利害調節に対する感覚がなければすべての行動は有意義な成果を勝ち取ることはできないであろう。